

(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

キューバはフロリダ半島から南へ145<sup>キロ</sup>、東西に長く延びる島国だ。全長は1250<sup>キロ</sup>、面積は約11万平方<sup>キロ</sup>。本州の約半分に相当する。東にバハマ諸島、南にジャマイカ、南西にハイチやドミニカ共和国のあるエスパニョーラ島を望む。

不思議な国である。長く社会主義の国として歩んできた。それが故、東西冷戦、中ソの確執、ソ連崩壊といった戦後の歴史に翻弄(ほんろう)されてきた。米国の経済制裁はキューバ経済をどん底にたたき込んだともいう。

そんなキューバの印象といえば、カストロであり、ゲバラであり、貧しさであった。もちろん革命前にこの国に暮らし、「誰がた



やまもと たろう  
山本 太郎

キューバ紀行

めに鐘は鳴る」や「老人と海」を執筆したアーネスト・ヘミングウェイのキューバでの足跡を知らないうけではないが、現在のキューバとは関係ないと思っていた。

から歩く。確かに物資は少ない。数十年前の中古車が走る。貧しくはあるが、治安は悪くない。むしろよい。そんな街を歩きながら、考えたことがある。

一方で、キューバは貧しい国でありながら、人々の平均寿命や乳児死亡率といった健康指標が良い国、多くの開発途上国に医師を派遣する国として知られていた。国際保健を専門とする者にとって以前から興味深い国であった。そんなキューバを訪ねる機会があった。首都ハバナに、心地よい季節風が吹きぬける3月中旬のことである。通りを人々が談笑しな

傲慢(ごうまん)な豊かさということがある。そんな豊かさがあるかもしれないということを中近東のある街で考えたことがある。一方キューバには、貧しいが清潔な暮らしというものがあれば、そうした暮らしがある気がした。そうした暮らしは、古い日本社会が持っていたものかもしれない。幕末に日本にやってきたアーネスト・サトウが書いた日本だ。そうした方向は、日本がもう一度目指すべきものかもしれないという気さえした。もちろん数日の滞在で分かることではない。ただ、幾つかの国を行き来して、その国の、あるいはその街においては、少しは分かる気がする。

(長崎大熱帯医学研究所教授)